

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 23 日現在

機関番号：13601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720123

研究課題名(和文)元禄期の江戸における浮世草子及び俳諧ネットワークの研究 出版文化を基盤として

研究課題名(英文)A study of Ukiyo-zoshi and Haikai network in Edo in the Genroku era:based on publishing culture

研究代表者

速水 香織 (HAYAMI, Kaori)

信州大学・人文学部・准教授

研究者番号：60556653

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円、(間接経費) 450,000円

研究成果の概要(和文)：近世江戸において活動した出版書肆の活動調査を行い、上方書肆との関係について考察した。その中で、特に貞享・元禄期には上方出来の浮世草子を独占的に取扱った万屋清兵衛を中心に調査を行った結果、元禄末年頃に売れ筋の作品確保のため、積極的に上方出版界に働きかけていたことを確認した。また、近世小説に登場する「伊勢参宮」の描かれ方が変容することに着目し、人々の興味や嗜好のありように、出版活動が敏感に反応していたことを指摘した。

研究成果の概要(英文)：Yorozuya-Seibee was doing business in Edo, and had been selling Ukiyo-zoshi published in Kamigata in Jokyo-Genroku period. This investigation pointed out that Yorozyua cooperated with the publisher in Kamigata to provide popular works for the people in Edo. In addition, it became obvious that the description of Ise Sangu which was described in the stories transformed in accordance with the change in the society.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：江戸時代 近世文学 出版文化 浮世草子

1. 研究開始当初の背景

日本文学は、近世前期において、出版文化を基盤として急激に、しかも著しく大衆化した。中でも、井原西鶴作『好色一代男』(天和2刊)以来、上方に発達して江戸に伝播し、三都において100年余りも陸続と生み出された浮世草子、また、京から大坂、そして江戸へとネットワークを広げ、全国的に広く愛好された俳諧・雑俳は、近世という時代の特徴を考える上でも重要な分野であり、現在までに多くの研究が積み重ねられてきた。しかしながら、これら文芸創出の基盤となった三都における出版文化の、文学に与えた影響の実態及び上方出版文化と江戸出版文化との相違ならびに両者の交流形態の解明は、ながく未整理未解決の課題となってきた。特に、三都の出版界が他地域との取引を一般化する貞享・元禄期(1685-704)の江戸出版界についての研究が手薄な状況にある。

江戸書肆が活動を拡大する当該時期の江戸出版界の動向を明らかにすることは、すなわち文化生成の過程に焦点を当て、江戸と上方とを繋ぐ、近世前期から後期にかけての文化史を描き出すことにも通じる。当時活動していた江戸書肆は、常に上方との密接な関係を保ち、上方出来の浮世草子や俳書を旺盛に売出しつつ、江戸において成される文学作品出版の担い手となると同時に、作家に対してもスポンサー的立場に立ち、その作品内容にも影響を与えた可能性が指摘されるからである。

浮世草子に関していえば、貞享から元禄期前半に刊行された西鶴本に代表される上方浮世草子出版に係る江戸書肆は、西鶴本の初印出版が終焉を迎える元禄9年頃から各々独自の活動を展開し始める。元禄期後半から江戸で販売される浮世草子には、上方板に加え、桃林堂蝶磨作を初めとする江戸板浮世草子が少なからず含まれている。これら江戸板浮世草子は、西鶴本終焉から八文字屋本の登場までの期間に集中して刊行されており、当時の江戸において新たな作品の受容に応えるべく書肆の主導によって成されたものと考えられるが、数点の作品が翻刻され(吉田幸一編『古典文庫』468、1985等)、富士昭雄氏により江戸板浮世草子の概要が示され、作者・書肆・絵師の交流があったことが指摘されている(『江戸の浮世草子』西鶴と仮名草子』笠間書院、2011、初出『東京大学教養部人文科学紀要』26号、1962)。それ以後、江戸板浮世草子についての研究は、進展を見ているとは言い難い。

そこで研究代表者は、本研究課題に着手する以前に、貞享・元禄期に江戸において中心的な書肆のひとつであった松葉軒万屋清兵衛に着目し、開業から閉業までの出版活動を調査し、書肆活動を中心とする観点から当時の文学活動を分析した結果、浮世草子の生成には出版書肆からの干渉が存在したことを

確認すると共に、江戸書肆は上方書肆の意向を尊重しつつ江戸という地域において浮世草子執筆に携わる俳諧師とも密接に係わりつつ独自の活動を展開しており、それが元禄末年からの江戸前句附俳書創出へも繋がっている可能性を指摘した。

2. 研究の目的

本研究では、出版文化を基盤として江戸板浮世草子並びに江戸で発展した俳諧に注目し、個別に言及されることの多かったこれらの作品群を《出版文化》という観点からとらえ直すことにより、江戸における作品創出から、大衆文化生成の過程を解明することを目的とする。具体的には、以下に述べる点を主に目的とした。

(1) 貞享・元禄期から享保期以後に至る江戸書肆の出版物に関する調査を進め、近世前期における江戸出版文化研究のさらなる充実を図る。とりわけ、江戸において浮世草子並びに俳諧書を取扱う主要な書肆(万屋清兵衛・西村半兵衛・須原屋茂兵衛)についての調査を継続して行う。

(2) 江戸における浮世草子出版は、貞享・元禄期前半までは、万屋清兵衛・西村半兵衛の二軒がほぼ独占しているが、元禄期後半には、多くの書肆が参入するようになる。この江戸における浮世草子の出版状況を整理し、江戸板浮世草子に見られる上方浮世草子からの影響、また江戸板の独自要素の有無について検討を加える。その上で、江戸における上方文学の享受のあり方について考察し、そこから江戸独自の方法や特徴を明らかにしてゆく。

(3) 貞享・元禄期の浮世草子作者は、同時に俳諧師でもある場合が多い。さらにこれら作者の活動には出版書肆の存在が密接に係わっていることが指摘されている。ここから、主に元禄期後半に多く出版された江戸板前句附俳諧書の編者について調査し、同書板元となった書肆との関係性を考察する。

3. 研究の方法

出版文化を基盤として、そこに諸作品を位置付けて作品・書肆・作者が構築するネットワークの実態を探ってゆくという研究の性質上、出版書肆の活動調査が、研究を進める上での基礎作業となる。具体的には、以下の点を主な作業とする。

(1) 江戸書肆のうち、上方と継続的な関係を保ち、浮世草子や俳諧、また通俗軍書等の出版に長期に亘り携わった万屋清兵衛、須原屋茂兵衛の出版物に関する調査を継続して行う。これに加え、上方書肆の江戸出店とし

て宝永 4 (1707) 年から活動が確認される小川彦九郎をも調査対象とし、出版物を年表化することにより、諸作品の出版が書肆活動にとっていかなる意味を持っていたのかについて考察する。さらに、連名となる板元の記録から、江戸書肆と上方との関係と変化、また従来言及されることのなかった江戸書肆同士の取引の実態について分析する。

(2) 従来言及されることの少なかった江戸板浮世草子について、上方板浮世草子並びに先行文芸からの撰取の方法を明らかにするため、諸作品に共通して見られる要素を抽出し、その描かれ方を分析する。具体的には、近世初期から仮名草子等に話題として取り上げられ、西鶴本をはじめ多くの浮世草子に見られる「伊勢参宮」「相对死」という要素に着目して、地域・時期によるそのイメージの変遷及び話中における位置付けについて考察した。

(3) 江戸板前句附俳諧は元禄 15 (1702) 年から刊行され始めるが、享保 8 (1723) 年までは万屋清兵衛が刊行の中心となる。万屋板前句附俳書は万屋自身が編者となるものが多く、収録句の点者は露月・竹丈・蝶々子といった当時江戸で活躍した人物が担っており、万屋の活動からは其角との関連も想定されるため、俳書から確認される俳人と書肆との係わりについて分析し、元禄末年における江戸俳壇のネットワークの実態を探る。

4. 研究成果

江戸出版書肆の調査を充実させ、江戸と上方との出版界の関係性、ならびに江戸出版界内部における書肆の繋がりについて分析を進め、貞享・元禄年間に出版された浮世草子の内容的な変遷に言及した。具体的な成果は、以下に纏めた。

(1) 江戸書肆のうち、特に万屋清兵衛の調査を中心に行い、これまでに研究代表者が発表した同書肆の活動調査結果(「万屋清兵衛出版年表」『皇學館論叢』54-2号、2003)を大幅に補完する調査を行う事が出来た。具体的には、まず万屋と八文字屋との関係が、既に元禄 15 年には確認される問題について、両者の連名板『孟子』(元禄 15 刊)は、刊記の状態から、万屋清兵衛の主導によって八文字屋と連名で刊行された可能性が高いことが、同書の調査によって判明した。これは当時の三都における浮世草子出版の流れにも係わる問題でもある。また、同書肆の活動後期にあたる宝暦七(1757)年刊『青閨閣観』(1巻)は、江戸本屋仲間割印行事である万屋・小川彦九郎・吉文字屋治郎兵衛の三軒によって刊行された漢籍の和刻本であるにも係わらず江戸本屋仲間の出版記録「割印帳」未記録の書籍であり、行事の出版活動につい

て一考を要する出版事例であることをつきとめた。上記の成果については、該当書籍の周辺に位置する出版物(特に漢籍和刻本の出版状況)にまで調査を及ぼし、今後論文化して発表する予定である。

(2) 近世初期から仮名草子にもしばしば取り上げられた「伊勢参宮」という要素に着目し、当初は参宮による利生と参宮の禁忌を説くものが主であった参宮説話は時期が下るにつれ参宮の利生がクローズアップされるようになり、西鶴の町人物浮世草子では、神異が直接語られることはなく、人間活動の舞台背景として機能するようになる。以後の浮世草子では「参宮途中に起こる事件」を描くための装置として話中に登場する場合が増加するが、時期により神異が大きく取り上げられる様子は、出版物と世間の興味のありようが不可分になっていた状況を示すことを指摘した。また、伊勢参宮を話の重要な要素とする『好色五人女』巻二について、登場人物の設定及び話の展開を分析し、当時の社会的風潮から、登場人物に対して付与されたイメージを明らかにした上で、作品の再評価を試みた(『好色五人女』巻二「情を入し樽屋物かたり」における「ぬけ参り」(西鶴研究会))。上記の成果は、作家活動並びに出版活動が、貞享期には既に読者・地域の受容に敏感に反応していたことを実証すべく行われたものであるが、江戸板浮世草子については、当初は予定していなかった天和・貞享期の石川流宣作浮世草子等、極初期の作品をも視野に入れる必要が生じたため、上方板諸作品との関連について更なる調査をも含め、今後分析を継続して行う予定である。

また、元禄 15 年以後の江戸板前句附俳書の出版は万屋清兵衛が刊行の中心となっているが、他にも同書肆は菊岡沾涼作の地誌を刊行しており、露沾門系俳人との密接な係わりが指摘出来ることを確認した。

5. 発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

速水 香織、「近世前期文芸における大神宮と伊勢参宮」、『皇學館大学創立百三十周年再興五十周年記念 神宮と日本文化』、査読なし、2012 年 4 月、pp.419-441

[学会発表](計 1 件)

速水 香織、「貞享期の浮世草子における「後追い心中」について」、東海近世文学会平成 23 年度 10 月例会、査読なし、2011 年 10 月 22 日、於熱田神宮文化殿

[図書](計 1 件)

柳沢昌紀責任編集、富田成美、速水 香織、安原眞琴共編、東京堂出版、『仮名草子集

成』、第 50 卷、2013 年 11 月、pp.1-146 ,
311-315

〔その他〕

速水 香織、『『古事記伝』の出版』、本居
宣長記念館、平成 21 年度宣長十講第 5
回、2011 年 10 月 15 日、於松阪市松阪公
民館

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

速水 香織 (HAYAMI, Kaori)
信州大学・人文学部・准教授
研究者番号 : 60556653